

LICENSED PRODUCT  
Black  
3/Color  
White  
Magenta  
Red  
Yellow  
Green  
Cyan  
Blue

1.

のこす 外-45!!

実は、

島の北端の  
とんがり  
たいし  
か跳ぬ  
おな  
記

2、須磨明  
すか  
跳ぬ  
島と  
よ  
は、

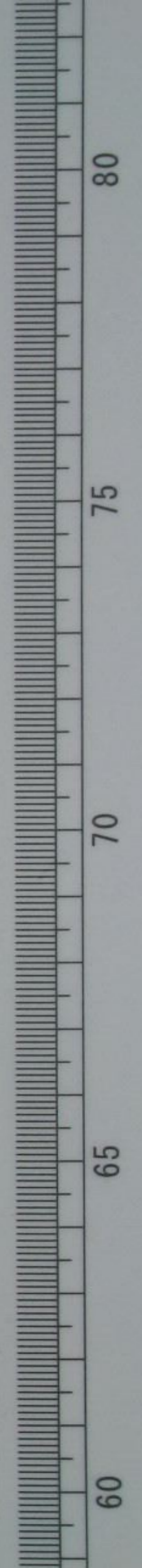
也明  
すか  
跳ぬ  
島と  
よ  
は、  
須磨

今  
すい、  
私  
は、  
淡路  
島と  
よ  
は、  
須磨

◇

淡路  
島  
均

淡路  
島



たかた、もちろん、つうのわさな山とりの位  
はしか見えなうたうた。

ついで、大毎の羽た飛行士は乗せると

ついで、大毎十七号機で、三千メートルの高

さをと昇つたが、大毎機は、流路島はもち

ろん、四國でも見え の上空 ちけれい、

それだけの高さから眺めると、流路島も、や

つはり、流路島も存在ししかあり得なかつ

た。

それゆゑ、流路島もつ換つたことほ、

ほんの

和は、明もかゝる若屋へ移つて見たりけり、岩  
 屋の鼻の繪島なるの美しさは大好きなりけ  
 り、しりし、僅にその附近にけり知らなかりけ  
 りとある。



ところか、つら四五日前、兵庫から洲本へ  
 移つて、洲本から福良まで自動車ドライブが  
 して見たりし、あまうらも今までの概念以  
 上になかなかなあることを知りし、和は驚き

はいね

した所、大津に...  
 ...  
 ...

4

た。

洲東を去り、養田、八木、神代、賀集のあ

たしをトライカし、あしと、これか、あの明

石階辺からわさな、一つの山としか見えな

島のと ほんの は、いしとちかくとれな

い信である。賀集の藩のひろくとした境

ぬや、咲き誇る花櫻を眺めると、いとし

この、和んは、淡路島の内りあふ、やうに思

なく、なす まのか なるうたうた。

淡路の人々、淡路島自体を本州と呼ぶの

Handwritten notes on a separate sheet of paper at the top right, including the characters '五' and '四'.

たさくもある。 三一二、 三、 かの 朧め 紀州

たか 加須 藤明 石の 入と、 及く 自白と する 凡

は 呼おの たさくもある。

今 交 何 じめ、 和 じ け、 三 ぬ 加、 成 程 と、

う ち の っ 加 ぬ ね。



洲 本 正 は、 今 月 か、 洲 本 ~~と~~ 踏 と じ ょ ぐ 加 出 米

る ぬ ね。

洲 本 日 イ く 向 ぬ 加 ち 段 神 戸

行くさま来るさはヨイトサ船便り

洲本日イ / 大津梅水浴場

續く松原ヨイトサ夏知とめ

洲本日イ / 千早川流る、水に

春か果るヨイトサ花うけし

とりゆやうな唄か、藤井紫影博士の選に

ふつと十、お節出さるる。

踊り子おはは、登志のおん中に輪を作して、

この節にうねを踊るをある。そして各人の

踊り目毎に、踊り子は「えいざん、えいざん

7.

と黄色いおひし、掛け紙をかける。い、ね、

さうだね」といふ意味の言葉をあふく、

れたものたさうたか、唄のふしにも踊り手に

もあんなすゝ感心するよと、ころはなげめど、こ

の「えいおん、そやさん」と唄ひ雑すところ

は、一種の哀調があるし、誠につゝ、氣持さむ、〇 実にえいおんであ

日。



福良が、船に乗し、  
鳴門の渦巻を見に

Handwritten notes on a separate sheet of paper, partially visible at the top right of the page.

行つた。

「湯か仰山、巻の二ツ、  
そらもう、左の  
也ぢや。」

と、船へ一し、  
か先つさう言つて教へてくんなたの  
あるはと奇観は奇観なるが、  
大さ過おたたか、あんまり  
とはなかつた。

船自身か海深く鳴ひ  
うま大さな ~~湯~~ 湯巻をい  
想後しおん



此、大巾敷十の湯巻がそこ、に巻くは  
 るの心か、あまりに危険らしくなき過  
 ことか、何れも物足りなき感じなき  
 事。

三十一、三十一、三十一、三十一、  
 大鳴門の上と、飛行機、海上すれ  
 空飛行かしく見たくしたまふた。早  
 連、大毎の羽た飛行士か松下飛行  
 見たくと思つたのか、よく考へし  
 悲しや、このあたりは要出基地帯  
 有る。

手紙の  
 手紙の  
 手紙の

小中出早なる。

潮のしぶき如羽織にかゝることにはおしり氣

をもんじの福良茶器に酌をくせりなるか

ら、船を行な岩の沖に船つし、流行

唄を唄つてゐると、つし船か、知は、

果敢なる遣懶なさを身にしみくと覚え

~~~~~~~~~

乙、憂ははしくなるやいありて。(四月七日)

Handwritten notes on a separate sheet of paper, partially overlapping the main page.